

豊公謡曲

高野詣

シテ 豊太閤の母の霊

子方 豊太閤

ワキ 豊臣家臣

ワキツレ 従者

所 紀伊高野山

時 春

「花を手向の山の名の。く。高野の奥を尋ねん。

「抑是は太閤の御所に仕へ奉る者なり。さても此御所三韓御退治のため。九州に御在国の砌。北堂御不例以外の外なるよし聞し召され。今一たびの御対面と思し召し。時日移さず御急ぎなされ候へども。無常の習ひにて空しくなり給ひぬ。力及ばせ給はず御歌の候ひしは。亡き人の形見の髪を手にふれて。包むに余る涙悲しもと遊ばされ。御葬礼

を御つとめ有つて。重ねて御下国なされ。三韓御退治にて。文禄二年八月の末還御候。春立ち返り既に三回に当り候へば。高野山に御登りなされ。いよく御菩提をも弔らはせ給ふべきにて候ふ間。御供仕り候。

「小車に法の門出の遙々と。く。かへり都に立つ雲の。迷はぬ道は世の中の。よし足曳の大和路や。末を急ぎて紀の国の。高野の山に着きにけ

り。
く。

詞

「御急ぎ候ふ程に。高野の山に御着きにて候。北堂
春岩大禅定尼の御位牌所に御安座ありて。御焼香
なさるべく候。御車を寄せ候へ。

シテサシ

「人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふ
なる。無明塵勞即是菩提。大道本来所染なし。
白雲何ぞ心あらん。

歌

「暁を高野の山に待つ程や。く。苔の下にも有明

の。月の光は春の夜の。花の木陰に若く物は。亡
き身の果といひながら。名は残る世の習ひかな。
く。

ワキカゝル

「春の夜の夢の浮橋とだえして。峰に残れる暁の。
ほのかに見ゆる面影は。それかあらぬか思ほえず。

シテ詞

「反魂香にあらねども。花の匂ひに誘はれて。谷よ
り出づる鶯の。声こそ道のしるべなれ。

ワキカゝル

「あらず不思議や。月の夜陰に老尼の姿の見えけるぞ

や。こゝはもとより女人結界の山なるに。不浄の
身にてまう登る。故を如何にと答ふべし。

シテ詞

「現にもあらぬ身なれば津の国の。」

ワキ

「難波の浦のよしあしの。二つの道も。」

シテ

「一筋に。」

地

「頼む仏の御心に。く。かゝる高野の山雲の。浮
世の中の罪科を。ゆるし給ふぞ有難き。く。」

ワキ

「簾中近う参り此処の謂れ委しく語り候へ。」

クセ地

「抑金剛峯寺と申すは。帝都を去つて二百里。郷里
を離れて無人声。八葉の峰八の谷。諸行無常の花
をだも。晴嵐枝をならさず。」

シテサシ

「生滅々已の月をさへ。白雲影を隠さず。おのづか
ら静なりける嶺の松。弘法大師其昔。入唐あり
し折からに。薩埵にうけて仏法も。東漸なりと日
の本に。三鉢を投げて此行方。とまらん山を我が
あらん。伽藍と定め申さんと。遥の空に投げ給ふ。」

クセ「三鈷は落ちて此嶺の。梢にかゝる其故に。三鈷の
松とは申すとかや。されば星霜ふりにたる。大塔
ことに金堂。軒端かたぶき崩るゝを。悲しみ給ひ
豊臣の。御代の始めにたらちねの。逆修のために
いらかをも。上人之を造営す。

シテ「猶陰深き奥の院。

地「古木怪巖苔むして。連なる道の右左。石塔数もい
さ知らず。かゝげ添へたるともし火の。かげに晨

鐘夕梵の。心耳をすます霊地なり。

ロンギ地「げにや老尼の物語。聞くにつけてもなつかしき。

住家を知らせ給へや。

シテ「かゝる貴き此山の。浄土に登り住む事は。賢き人
の孝行の。道に引かるゝ心かな。

地「そもや浮世に亡き跡は。色即是空なるものを。何
の残りて呼子鳥の。声をかはすも山中に。覺束な
くぞ覺ゆる。

シテ「天が下。治むる雲の上人の。かゝる山路によちの
ぼる。心の程の嬉しさを。深山隠れの老木の桜。
花に顕れ出づるぞや。」

地「今の宣ふ言の葉は。生ふし立てたる我行方。千代
もと祈るたらちねの。春岩にてましますか。」

シテ「其原やく。伏屋に生ふる箒木の。ありとは見え
てあはれ世の。昔に帰る心地して。」

地「袖の涙は石の上。ふるや雨夜の春の月。霞にまぎ

れ失せにけり。く。

ワキ詞「如何に誰かある。」

ツレ「御前に候。」

ワキ「大相国今夜不思議の御霊夢を御覧ぜられて候ふ
間。此寺の衆徒を召し出し。春岩の御菩提を。い
よく弔はせ申さうずるにて候。」

ツレ「畏つて候。」

歌「暁の尾上の鐘の一声に。く。僧は仰に随ひて。」

清巖山に参りつゝ。座具を述べ香を焼き。南無尊
靈春岩大禪尼。一見阿字五逆消滅。真言得果即身
成仏。

後シテ「あら有難の御弔ひや。此御経の功力により。いよ
く五障の苦を離れて。只今夢に顛はれけるぞや。

ワキ「それながら見しに変わる御容。七宝莊嚴の玉のか
んざし。忍辱慈悲の御衣。色も妙なる御声の内に。
仏言を唱へ出で給ふ。是や誠に即身成仏。疑ひも

なき有様なり。

シテ「是れ孝行の道により。微妙の法を得る事の。浅か
らざりける志。いかで報謝をつくすべき。

ワキ「見ればげに。歌舞の菩薩となり給ふ。遊戯神通の
事なれば。そのかみ世尊の御前にて。阿難座して
歌へば。

シテ「迦葉立ちて舞ふ。

ワキ「其音楽の一ふしを。只今かなで見せ給へ。

地「さては昔在靈山の。妙なる法をひるがへす。袂ゆ

たかに立ち舞へる。舞樂の遊びは面白や。(舞)

地「思へば過去の宿縁なれや。く。ふさんかせんき

う因縁の。善根こゝに白雪の。花を散らせる高野

山。瑞雲たなびき。靈香四方に薫じつ。笙笛琴

箏篋琵琶鏡銅鉞。思ひくの声はして。廿五の菩

薩只今こゝに影向なりて。五色の旗は霞に棚引き。

玉の御輿は日にかゝやきて。来り迎ふる此寺や。

靈山会場も目前たり。此樂しみを譲り置く。君

が齡は万歳の。守護を加ふる志。只孝行の道によ

る。く。行末こそは久しけれ。